

1. 略歴

- 1989年3月 東京外国語大学外国語学部スペイン語学科 卒業
1989年4月 東京外国語大学大学院外国語学研究所修士課程入学（ロマンス系言語専攻）
1991年3月 同 修了
1991年4月 Centro de Estudios Literarios, Instituto de Investigaciones Filológicas de la Universidad Nacional Autónoma de México [メキシコ国立自治大学文献学研究所文学研究センター] 訪問研究生（メキシコ政府交換留学生として、～1992年2月）
1992年4月 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程進学（地域文化専攻）
1995年3月 同 単位取得退学
1996年4月 法政大学経済学部助教授
2002年4月 Centro de Estudios Latinoamericanos Rómulo Gallegos [ロムロ・ガリェーゴス・ラテンアメリカ研究センター、ベネズエラ] 客員研究員（～2003年3月）
2004年4月 東京外国語大学外国語学部助教授
2007年4月 同 准教授
2009年4月 東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授（大学院重点化による）
2012年4月 同 教授
2013年10月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

スペイン語圏の文学、ラテンアメリカ思想文化論

b 研究課題

知識人たちの環大西洋的ネットワークの形成。

c 概要と自己評価

2013年度は所属が変わるなどして慌ただしかったが、研究課題である環大西洋地域を横断する知識人たちのネットワークの形成と個々の活動、その表現の様態についての研究は進行中である。一部は13年度の大学での講義として還元したし、その後、書籍化に向けて執筆にいそんでいるところ。翻訳や雑誌などでの啓蒙活動も活発に行っていると行ってよい。その成果は14年度には結実する予定である。

d 主要業績

(1) 論文

柳原孝敦、「祝祭と革命—クリス・マルケルとラテンアメリカ」、港千尋監修、金子遊・東志保編『クリス・マルケル 遊動と闘争のシネアスト』、103-124頁、2014.11

柳原孝敦、「羊男は豚のしっぽの夢を見るか？—村上春樹の〈キャラクター小説〉化をめぐる」、柴田勝二、加藤雄二編『世界文学としての村上春樹』、125-142頁、2015.2

(研究ノート)「突き出した指はどこから来て、どこへ行くのか——スペイン内戦のポスターとソヴィエト、そしてメキシコ」『れにくさ 特集 ロシア・中東欧』6号、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 現代文芸論研究室、2016年、91-99頁

(2) 書評

田尻陽一監修『現代スペイン演劇選集』I、II、カモミール社、2014、2015年日本イスパニヤ学会『会報』第22号、2015年10月10日、13-14頁

キルメン・ウリベ『ムシェ 小さな英雄の物語』金子奈美訳、白水社、2015年『ラティーナ』2015年12月号、63頁

ウンベルト・エーコ『プラハの墓地』橋本勝雄訳、東京創元社、2016年、『週刊現代』2016年3月26日/4月2日号、138頁

カルロス・フエンテス『テラ・ノストラ』本田誠二訳、水声社、2016年『産経新聞』2016年7月3日（日）、22面

(3) 学会発表

国内、柳原孝敦、「劇場と祭のトポス—カルペンティエールの場合」、日本ラテンアメリカ学会第35回大会、関西外語大、2014.6.7

(4) 啓蒙

柳原孝敦、「文字の都市の住民たち—ガブリエル・ガルシア=マルケスに対するアンヘル・ラマの共感と差異の感情」、『ユリイカ』、2014年7月号、110-117頁、2014.7

立石博高編著『概説 スペイン文化史—18世紀から現代まで』（ミネルヴァ書房、2015）第8章、第13章、第15章執筆分担

(5) マスコミ

『海外文学・文化2014回顧 ラテンアメリカ』、『図書新聞』、2014.12.20

(対談)「ゲバラの夢見た世界とは」（伊高浩昭と）『週間読書人』2015年9月11日、1-2面

(インタビュー)「誌上採録 ハルキをめぐる読みの冒険4」（聞き手：小澤英実／マシュー・チョジック）『NHK ラジオテキスト 英語で読む村上春樹 世界のなかの日本文学』2015年10月号、144-155頁

「記憶についての／記憶としての映画—パトリシオ・グスマンとチリのクーデタ」『SPUTNIK YIDFF Reader 山形国際ドキュメンタリー映画祭2015』2015年10月8日、33頁

『海外文学・文化2015回顧 ラテンアメリカ』、『図書新聞』2015年12月19日、7面

「Aujourd'hui maman est morte —『偶景』を巡って」（シンポジウム「SPINNING BARTHES 100歳のロラン・バルト」）『すばる』2016年3月号、集英社、188-189頁

(鼎談採録)「J・G・バスケスを芥川賞作家と読む」『週間読書人』2016年6月17日号、8面、7面（小野正嗣、久野量一と）

(6) 翻訳

エドゥアルド・メンドサ『グルブ消息不明』東宣出版、2015、232頁

セサル・アイラ『文学会議』新潮社、2015、192頁

アレホ・カルペンティエール「日々刷新される生まれ来る芸術の証拠」『キューバ映画のポスター—竹尾ポスターコレクションより』展覧会図録（東京国立近代美術館フィルムセンター、2016）8-9頁

フアン・ガブリエル・バスケス『物が落ちる音』松籟社、2016年、314頁

アルフォンソ・レイェス『アナワクの眺め（一五一九）／Visión de Anáhuac (1519)』ヌエボレオン州立大学、モンテレイ、メキシコ、2016年、78頁（上記二言語版の改訂版、対訳。アドルフォ・カスタニョンによる序文の翻訳も含む）

ロベルト・ボラーニョ『第三帝国』白水社、2016、404頁

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

日本ラテンアメリカ学会第34回大会（於：獨協大学）におけるシンポジウム「ラテンアメリカ研究の射程」のパネルとして報告「ラテンアメリカ主義再考」2013年6月2日（モデレーター：佐藤勘治、他のパネリスト：砂野幸稔、園田節子、中野由美子、コメンテーター：鈴木茂、工藤多香子）

「スペイン映画の魅力」、川崎市民アカデミー「世界を旅する⑩スペイン・ツアー」の一環として。2014年7月2日（於：川崎市生涯学習プラザ）

「ガルシア=マルケスは誰が読んでいたのか？」立教大学文学部文学科文芸・思想専修専攻主催公開講演会「ガルシア=マルケスを読む—ガルシア=マルケス受容の来し方行く末」2014年10月4日（於：立教大学）

「翻訳は難しい」セルバンテス文化センター東京「スペイン語文化研究者との出会い」2015年7月2日（於：同センター）

(2) 学会

日本ラテンアメリカ学会理事（研究年報担当）2012年6月～2014年6月

日本イスペインヤ学会理事（広報担当）2014年4月～現在にいたる